

流山稲門会

【交譲葉】俳句の会 報告

令和六年二月句会(第一四一回)

兼題 「春寒 余寒」

開催日 令和六年二月二十四日

開催場所 生涯学習センター

出席者 七名

投句者・選句者 七名

(五点句)

●灰色の朝の目覚めや紅椿

寿歩

選評：まず、灰色と紅色との対比が効果的で容易に映像が目に浮かびます。灰色の空には作者の心情が重ね合わされているのかと思いましたが、これは違っていたようです。紅椿は春に先駆けた風物詩と言えるでしょう。

(小牧記)

●足跡を頼りに駅へ雪しぶく

寿歩

選評：下五の”雪しぶく”が目を引く。重吹く、繁吹く、雨混じりの雪が吹き付ける様子。

滅多に雪の降らない首都圏に住む我々は、雪道を恐る恐る足跡の上に自分の歩を重ねるのである。

しっかりとした観察と実体験が、この句の支柱となっていると思う。

(玄鳥記)

(四点句)

●春寒し渡る濡れ縁足の裏

互酬

選評：春浅く未だ空気もひんやりと寒いある日、用事のためか庭の芽花を見るためか、濡れ縁に裸足で立ち歩いたのだらう。その時の裸足の足裏がとらえた春寒の触感を詠んだのだ。五感(視・聴・嗅・味・触)のいずれかで、季節感を表現する句は多々あるが、足裏の触感にフォーカスし、表現した点を評価する。

(徹心記)

(三点句)

一年の畑の目論見日脚伸ぶ

玄鳥

缶からの行きつ戻りつ春一番

玄鳥

(二点句)

戸を叩く中手骨頭春寒し

玄鳥

赤ん坊笑いてくしゃみ春寒し

艸寛

「どうだった」父と受験子日比谷線

寿歩

雪とけて顔出すおもちゃ孫はしゃぐ

互酬

(一点句)

春寒や予報違わず白い朝

小牧

立ち話しすぎ喉より余寒かな

寿歩

公園のベンチにでんと雪だるま

夢心

ずっしりとシヤベルに重し春の雪

夢心

ずバスに笑顔を乗せて春少し

小牧

足場踏む職人さんにバレンタイン

玄鳥

大雪の予報出でたり春立つ日

夢心

(投句)

春寒く犬もフリース着て散歩

夢心

着膨れて犬がリードの余寒かな

徹心

冬薔薇捧げる妻は歳女

互酬

春浅し山は目覚めて始動かな

徹心

春の陽や君の手触れず六十年

艸寛

連れ立って団地のカフェ土筆籠

小牧

春浅し花芽(かが)は

じつと耐え時を待ち

徹心

日向ぼこ思わず眠る隣にも

艸寛

新年を祝う余興はハワイアン

互酬

桃の花下照る道を君歩む

艸寛

春浅し花野に遊ぶ夢の中

徹心

雪雷を知ったばかりで物知り顔

小牧

『句会後記』

今月の句会は、兼題が「春寒、余寒」と、難しいものでした。寒さに関連する感覚、感想、体験は、実に多彩です。皆さん、大いに勉強させられ、寒さの感覚を数多く指摘されてました。私は雪国の生まれですので、冬との経験が多くあります。寒さも場所により多彩です。何に焦点を合わせて作句されたか、理解することは大変難しいと思った句会でした。

（艸寬記）